

調子っぱずれの

デュエット



バルト・ムイヤールト／作
西村由美／訳

調子っぱずれの デュエット

*DUET MET
VALSE NOTEN*



バルト・ムイヤール／作 西村由美／訳

調子っぱずれのデュエット

1998年 4月 11日 初版第1刷発行

作 者／バルト・ムイヤールト

訳 者／西村 由美

発行人／中城 正堯

発行所／くもん出版

東京都千代田区富士見 1-12-21 BR九段1 (〒102-8180)

TEL 03-3234-4001 (代表)

03-3234-4064 (編集部直通)

03-3234-4004 (営業部直通)

印刷所／精興社

NDC950 くもん出版 264P 20cm 1998年

©1998年 Yumi Nishimura

ISBN4-7743-0208-2 Printed in Japan

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

調子つばずれのデュエット 目次

1	転校生	9
2	そんな目	18
3	赤い顔のロミオ	27
4	合計ふたり	33
5	レンドル通り四十三番	35
6	〈青い部屋〉	42
7	リックからの電話	48
8	リーサベレ王女とランテルファント王子	55
9	「……ランダーが好き！」	58
10	最高にすてきな罰 <small>ばつ</small>	63
11	リハーサル1	71

22	ブリュッセルは三ツ星のホテル	130
21	出発	124
20	バンザイ!	121
19	観客は手が青くなるまで拍手する	117
18	インスタント演劇講座	112
17	つめたい空気	106
16	最終リハーサル	101
15	やっぱり、いい友だち	95
14	虹	89
13	もうすぐ冬休み	81
12	リハーサル 2	77

33	アレックスの誘 <small>さそ</small> い	193
32	パーティーの飾 <small>かざ</small> りつけ	187
31	おたがいに空気	184
30	いい気味！	181
29	小さなけんか	176
28	FIN（おしまい）	170
27	へきみが好きの朝	166
26	ハンバーガー	163
25	まもなく幕 <small>まく</small> がおりる	151
24	海を見ると思い出す	140
23	幕 <small>まく</small> 間 <small>あい</small>	135

				34
			一本の赤いバラ	196
			ダンス・パーティーの夜	201
		36	階段 <small>かいだん</small>	207
		37	ふつか酔い <small>よ</small>	223
		38	再び舞台 <small>ふたたびぶたい</small> に	230
			日本の読者への手紙	250
			訳者あとがき	255

装画 || やまもとちかひと

装幀・デザイン || 北村武夫 / 佐々木一博

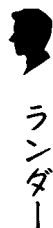
ほくは、ときどき、どうしようもなく書きたくなることがあります。いまもちょうど、そんな気分です。外は、陽光のふりそそぐ、すばらしい天気。「外においでよ」と、みんなを誘っています。だけど、ほくは、どうしても書きたい。外に出ていく気にはなれません。

「ばかだなあ。家のなかで『書いて』なんかしないで、外へ行ったらいいのに」と、みんなに言われます。そんなときの、『書いて』ということばには、ちよつと、軽蔑的なひびきがあります。だけど、ほくには見えるのです。ある男の子と女の子、そして、ふたりの世界がくりひろげられていくのが。ランダーの話しかた、リセロットの姿、そして、ふたりがどんなふうにいっしょに過ごしているか、はつきりわかります。

ランダーとリセロットの一年にわたる物語。それが、デュエットのように、ほくの心に聞こえます。はじめは、繊細で、ぴつたり調子のあつた、とても美しい歌。ところがあるとき、調子がくるいはじめて……

調子っぱずれのデユエット

1 転校生



月曜日の朝、ぼくは学校へ行くときちゆう、女の子ふたりがはでにころぶのを見た。自転車のハンドルがからまりあつたかと思うと、ひとりが「キヤーツ」と悲鳴をあげ、ふたりの自転車がひっくりかえつた。リックは、どつと笑いだしたけど、すぐにやめた。他人の災難さいなんを喜ぶのはよくないと思つたんだろう。

リックが自転車でぼくの横にならぶ。

「おい、ランダー、いまのを見た？」

「いや」ぼくはわざと知らんふりをして、首をふつた。ぼくたちは通りを横切り、校門へむかつた。自転車を自転車置き場に入れ、校庭を歩く。いつもよりちよつと早い。あちこちで、もう生徒たちがプラプラしてる。休み明けのせいか、はげしい遊びをする元気は、まだなさそうだ。

校庭のすみっこでは、男の子が何人か、「戦いだー！」とさけんで、まわりの子たちをひき入れ

ようとしてる。朝っぱらからあんなことをやるのは、アレックス・デフロートとその仲間が決まっている。アレックスってのは、どうしようもないやつだ。なんにでもケチをつけては、いぼってる。おれはスイス人みたいに大酒飲みで、トルコ人みたいにヘビースモーカーだとか、どこかの国の人——えーと、どこの国だったっけ？——みたいにナンパがうまいんだぜ、なんてばかな自慢ばかりしてる……。

「おや、かあちゃんが学校に連れてきてくれたの？　そんじゃあ、とうちゃんはどこにいるの？」
アレックスたちが女の子をからかっている。いままで学校では見かけたことのない子だ。ぼくは、アレックスの背中をつついた。

「おい、アレックス、ほっといてやれよ」

アレックスはふりむくと、ニヤリと笑った。

「ひよつとして、おまえの彼女なの？」と、けしかけるみたいに言って、まわりの仲間とどつと笑う。

女の子がぼくを見る。

「ちがう、そんなんじゃないよ」ぼくは言った。

べつに英雄気どりで女の子をかばったわけじゃなかった。

「彼女なら、キスしてみせろよ。さあ」ほかの子たちが、はやしたてる。

女の子が赤くなった。だけど、始業ベルが鳴って、アレックスたちの声をかき消す。

助かった。ぼくは女の子にうなずく。かわいい子だ。

「ありがとう」女の子が小声で言う。

そのとき、教頭のフェルファーク先生が来て、その子を職員室の方へ連れていった。ふたりが中にはいるまで、ぼくは無意識にその姿を目で追う。

「行こうぜ、ランダー。やるじゃん！」

リックに肩をたたかれ、ビクツとした。ちよつと照れくさい。

ぼくたちは教室へむかう生徒たちの列の方へ歩いていく。なんだか急に、いつもの月曜の朝とはちがう気分になった。

一時限目の歴史の時間、ぼくは、半分しか聞いてなかった。あの女の子のことが頭を離れなかったせいだ。ありがたいことに、ヘクシー・ウィリー——歴史の先生は、男のくせに、いつも暑苦しい香水のおいをさせてるんで、そんなあだ名がついてるんだけど——、やつの授業ときたら、手ぬきもいいところだった。エジプトの地図をさつとさして、必要なことを説明する。そして、ぼくたちに三十六ページから四十ページまで読めつて言うつと、自分は婦人雑誌へリベルかなにかを広げて、深ぶかといすに沈みこんでしまった。

だけど、次の時間はちがった。宗教のホツチエ先生——これももちろんあだ名で、ホツト「へ神様」というオランダ語からとったんだけど——、彼女はすごい。全身にエネルギーが満ちあふれてるって感じで、ナイアガラの滝の水がはねるみたいに笑う。授業のテーマもいい。へわたし、自分自身の探求まぐろというテーマだ。

その授業では自分のことを書く。「わたしは夢想家です」と、ぼくが書きはじめた、ちょうどそのときだった。ドアを遠慮がちにたたく音がして、フェルファーク先生がはいってきた。

「こちらは……」と先生は言いかけて、廊下の方へ、まねくような合図をする。

「こちらはリセロット・ヘイネマン」

ガーン。あの子だ。鼻にパンチを一発くらったみたいだった。前の席にすわっているアレックス・デフロートが、ニヤニヤ笑って、ぼくの机をコツコツたたたく。

「ほらほら、おまえの彼女だよ！」アレックスはニヤリと笑う。

ぼくは、ちよつと肩をすくめただけで、前を見ていた。フェルファーク先生はホツチエ先生と話している。リセロットは少しいごこち悪そうにモジモジしている。なんてかっこいいんだ！ ジーンズに赤いブラウスを着ている。目がすぐくかわいい。ブラウン、濃いブラウンだ。髪は、ほとんど金髪で、肩まで自然におろしている。ぼくが見つめていると、とつぜん、リセロットがぼくの方を見た。ぼくたちの目が、ほんのちよつとだけ合った。一瞬、ドキッとすする。ふたりの間に電流

が走つたみたいだった。

フェルファアーケ先生が出ていつてから、ホツチエ先生が言った。

「わたしは宗教を教えるの。ここが気に入るといいわね。とてもいいクラスよ」

「はい。このクラスは、超ちゆうすてきよ」アレックスが、小声でホツチエ先生の声色こわいろをまねる。

だけど、ホツチエ先生は知らん顔で続けた。

「せっかく、みんなの前にいるんだから、少し自己紹介じこしょうかいしてごらんなさい」

リセロットは、はずかしそうにうなづく。

「あの、えーと、リセロット・ヘイネマンといます。えーと……」

「うそじゃありません」アレックスがまぜつかえす。

ぼくはアレックスの背中せなかを強くつついた。ホツチエ先生は、アレックスに、子どもっぽいことをしちやいけません、と言っただけだった。あますぎるよ！

「わたしは、フィルフォルデから引っこして来ました。父がこちらでもっといい仕事につくことができたからです」

リセロットは話しながら、じつと前の方を見つめてる。うしろにはってあるポスターのどれかに視線しせんをむけてるようだ。

「弟がふたりいます。それから……ウサギが三羽」

アレックスは両手を頭のうしろに立てて耳をつくり、鼻をウサギみたいに動かした。ときどきあいつは、そんなばかばかしいことをする。

「レンドル通り四十三番に住んでいます」

たしか、あの通りにはお城しろみたいな邸宅ていたくがならんでいる。あんな所に住めるんなら、リセロットのお父さんは、きつとえらい人なんだろう。なんとなく、「すごいなあ」って気がした。

ホツチェ先生はリセロットに、マルクのと成りの席にすわるように言った。がっかりだ。ぼくは、つい、つめをかんだ。

たしかに、ホツチェ先生は「すばらしい先生」さ。だけど、いまは、外にけつとぼしてやりたい気分だ！ ぼくだつてひとりですわつてるだろう？ ぼくのと成りの席だつて空いてるじゃないか！ ちえつ、きよう一日がだいなしだ！

経済けいざいの試験はうわの空。数学の時間はちつとも集中できなくて、すんでのところで「土曜どようの罰勉ばつべん強きょう」——休みの土曜日に学校に出てこなくちゃいけないんだ——をくらくらうところだつた。

やつと四時。終業のベルが鳴る。そうだ、リセロットに、ノートを見せるとかなにか、てつだえることはないか、聞いてみよう。せきばらいをして、聞くことをもういちど、きつとことばにしてみる。それから、リセロットに近づく。でも、マルクのほうがひと足早かつた。

「一か月半もたつてるから、追いつくのはたいへんだよね。なにか、てつだえることがある？」